
再び輝く仁の星

龍斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再び輝く仁の星

【Zマーク】

Z9469Z

【作者名】

龍斗

【あらすじ】

南斗白鷺拳伝承者シユウは死んだ・・・しかし目が覚めると何とか分からぬところにいたそしてそこで神に会い転生をする仁の星の宿命と共に・・・

プロローグ（前書き）

シユウを知らない人はYOUTUBEでシユウと検索すればがあるので
それを見てください

プロローグ

此処は・・・此処は一体何処なのだ？私は確かに死んだはずあの時私はサウザーに捕えられ

聖帝十字陵の頂上で死んだはず・・・ふむならいゝはあの世なのかならば何処かにシバやレイ

カナンがいるはず・・・探してみるか

？「探しても見つからんぞ」

！？私が後ろをとられた！？仮にも南斗白鷺拳の伝承者である私が・・・只者ではないな

シユウ「貴方は？」

神「俺は神だ」

神？仮にそうだとしても何故こんなことひにそれに見つからないとはどうこいつことだ？

神「仮にじやなくて本当に神だぞそれといひはあの世じやないからお前が探している奴等は見つからない
そして何故俺がお前の前にいるのかと言ひどズバリ生き返つてみないか？」

シユウ「生き返る！？それは何故だ？」

神「いい質問だなまあ一番は俺がお前を氣に入つたからだ」

シユウ「私を気に入つたから?」

神「そうだ今時お前みたいな奴珍しいなと思つてな」

そんな理由でしかしそれなりばケンシロウやレイ、トキだって

神「そーりへんは俺の偏見だ」

シユウ「神が偏見していいのか」

神「まあそう言つて答へは?断るならあの世に逝かすが」

シユウ「私は・・・」

私はどうしたいんだ・・・このままあの世に逝つても・・・いやそ
んなのでは

駄目だ私の宿星は「星」広く愛を施し未来の希望に生きる星”この
ままでは避けぬな

シユウ「生き返らせてくれ」

神「そづ言つだらうと思つたぞあつ・やつだ」

シユウ「ん何だ?」

神「ちよつとな

シユウ「ツー?」

そう言つと神は指をパチンと鳴らしたと思えば私の体がいきなり光

だした

そして光が治まり私は自分を見て驚愕した

シユウ「これは……？？？若返っているのか？」

今私は南斗白鷺拳の伝承者となつた時の年齢18歳の姿をしていた
そして眼の傷もなくなつていた

神「ほお～お前けつこいつイケてるな」

シユウ「普通ぐらいだと思つが」

神「いやいやイケてるぞ」

シユウ「ありがと」

神「今度は死ぬなよ」

シユウ「ああ南斗白鷺拳伝承者シユウ」の名に誓つて

こうして私は……いや俺は新たな人生を歩むことになつた

プロローグ（後書き）

シュウの名前最後しか出てない・・・それにシュウの妻の名前
勝手に決めた

第一話「星の誕生」（前書き）

何処に転生させよつかなと思つてましたがハーレムなら此処！
の真・恋姫無双にしましたどいつもお楽しみください

第一話「星の誕生」

ショウ（知らない天井？・・・そつか転生したんだつたなさて何処に転生したんだ）

と思い体を動かそうとしたところ・・・・・

ショウ（ん？動かない・・・それこの体・・・赤ん坊？）

何故赤ん坊に？あの時若返りせてくれたからそのままこくのかと思つたが
とこうかこうするんだつたら何故若返らせたんだ？

神（いや～お前の若い姿が見てみたくてな）

ショウ（はあ・・・もうこいかといひで体が動かないんだが）

神（当たり前だ今のお前の才児だ）

ショウ（じやあどうすればいいんだ腹も空こいてきたし）

神（泣けばいいだろ）

ショウ（ふむそつか・・・・・では）

ショウ「ねえやあーねえやああああーー」

?「おおどりした坊お腹が空いたのか？」

? 「あうあうじゅあ母乳をあげなくぢゅね

出でたのは前の俺と同じ年くらの輝く銀髪が印象的な男性と美しい黒髪の綺麗な女性が出てきた。おそらく父と母だらつ

シユウ「けふ」

母「本当に可愛いわねさすがは私達の子ね」

父「ああそりだな将来いに男になるだらうな」

この2人は親バカだなしかこんな体験はしたことがない俺は小さい時から南斗の寺院で修行をしていたそれ故に親といつものが分からなかつたがこれは・・いいな
サウザーが温もりがビリとか言つていたが今なら分かるなあいつの気持ちが

シユウ（ん・・・眠氣が・・・）

母「寝ちゃつたわね」

父「ああ」

母「そういえばあなたはこの子の名は決めているの?..」

父「もちろんだ・・・だがそれはこの子が起きてからこいつ

母「そうね・・・おやすみ私達の可愛い坊や

シバウ (シバウス . . . 父上 . . . 母上)

第一話「星の誕生」（後書き）

転生したシユウが赤ちゃんの時ですね次回から色々と時間軸が飛びます

第一話「隣の夏候家」（前書き）

ハーレムの ですが偏り的には魏が多いかも

第一話「隣の夏候家」

あれから5年の月日が流れた動かなかつた体も動くようになったそ
して

今は、修行中

? 「ふつーはつーショオオ！」

斬！

? 「烈脚空舞！」

斬！斬！斬！斬！

? 「ふう～しかし驚いたな」

今の俺は、数えで5才まさか5才でここまで、白鷺拳ができるとは
やはり記憶が

残っているからか？

? 「秀」！」

秀「ん？」

突然名を呼ばれ振り返ると、黒い髪の少女と、水色の髪をした少女がこちらに走ってきた。

ちなみに、俺の姓は止、名は水、字は龍才だ今の秀とは俺の真名だ
真名とは、とても神聖なもので
教えられてもいない者が呼べば殺されても文句が言えないそうだ、
初めは驚いたが注意すればどうとでもなる

秀「春蘭か、どうしたんだ？」

春蘭「秀をみつけたからきた。秀はまたしゅぎよひへ。」

秀「ああ、強くなりたいからな」

? 「どうして秀は、強くなりたいの？」

と春蘭の妹の秋蘭が尋ねてきた。真名で分からぬだらうが春蘭の
姓は夏候、名は惇、字は元嬢で

秋蘭は、姓は夏候、名は淵、字は妙才だ

秀「春蘭や秋蘭を守れるようになるためだよ（一々）」

春蘭&秋蘭「／＼／＼／＼／＼」

秀「どうしたんだ2人共顔が真っ赤だぞ？」

春蘭「なつ何でもない！？」

秋蘭「うつうん何でもないよ！？」

秀「そうちならいいけど」

しかし何で顔が真っ赤なんだ？（鈍感）

春蘭「そ・・・それより

秀「何だ？」

春蘭「今日で最後なんだ・・・だから」

最後・・・・・そういういえば春蘭達は明日には洛陽の曹嵩様のところの娘の近衛兵として

洛陽に行くんだったな・・・・なり

秀「今日は、一日中一緒にような

春蘭&秋蘭「うんー。」

その日一日は、思つ存分遊んだしかし楽しい時間は早く終わってしまつのが常

田が暮れる頃には、もう親が迎えに来ていた。

秀「もう終わりだな」

春蘭「う・・・ん」

秋蘭「ねえ・・・秀」

秀「何だ?」

秋蘭「また・・・会えるよね?」

秀「もちろんだ、また会えるいや・・・会いに行く

秋蘭「ありがと!」

春蘭「じゃあまたね」

そつ言つて、春蘭達は帰つていったそして、翌日春蘭達は、洛陽に行つてしまつた。

そして、物語はここから1-3年後に序章が始まる。

第一話「隣の夏候家」（後書き）

幼馴染は夏候姉妹ってな感じですね
13年後だと18歳ですがその間に色々と旅をします
次回は新たな出会いへの旅

第三話「白鷺の旅立ち」（前書き）

この作品ですがやつぱつシコウだけとこいつのせあれかなと感ひので
ほくの好きな南斗六星拳の人を二人ほど登場させよつかなと思ひます
誰が出るかねお楽しみに

第三話「白鷺の旅立ち」

春蘭と秋蘭と別れて、13年の月日が流れたあの後俺はさうに修行をし白鷺拳を

今まで以上に使いこなせるよつになつた

秀「ふむ・・・」今まで白鷺拳を使えるよつになるとは

今の自分ならサウザーを止めることが出来たかも知れないな

まあ過ぎたことは仕方ないか

秀「そういうえば今日は、父上と母上の結婚記念日だつたな何か贈り物を用意しないと」

しかし何を渡そう確か去年は2人にお揃いの手作りの首飾りをあげたんだつたな

なら今年は指輪にしてみるか

秀「・・・できた」

「デザインは父上と奥上の好きな花の桜を元にした喜んでくれるところ
に遊び

「でも私は姓は李、名は明、字は白楚、真名は美蓮、秀の母です。

私が出てこようだったので血口紹介を

しました今日は蒼との結婚記念日です去年はあの子が首飾りをくれ
ましたが今年は

何をくれるんでしょうか。とても楽しみです。

秀「母上へ」

「あらあらあなた走つたら転びますよ。まったく可愛いわね。それ
に蒼の言つ通り

いい男に育つて母さんは嬉しいわ

指輪も出来家に帰ると、母上が外に出でていた俺は思わず母上に向かつて

走つた。

秀「母上、ただいま」

美蓮「おかえりなさい」

秀「母上、父上は？」

美蓮「まだ寝ているわたまの休みだから起しえないよ」と云うね

秀「はいー。あとこれ」

美蓮「あら、これは指輪かしら」

秀「首飾りをあげたから今度は指輪をと思つて」

美蓮「うふふ、ありがとう秀大切にするわ」

秀「ありがとう、父上氣に入るかな?」

美蓮「ええ、きつと蒼も喜ぶわね」

ちなみに、父上の仕事は何処かの県令の文官だそうだ何処かは知らないが

父上曰くよくサボるし戦では前に出たがること、愚痴を言つが良い人だと

言つていた一体誰だろつか?

そして、最近気になることがあった。それは黄巾党という賊があちこちに出て村などが

あの時レジスタンスを組んだ時もそうだったからだ。
ならば、俺がやることば一ツ仁星の宿命とかではなく俺の意思で

俺は旅に出るそしてせめて手の届く人々を救つてみせるまづは父上

と母上

を説得しないとな

秀「父上、母上話したいことがあります」

父「何だ改まつて」

秀「はい、俺・・・旅に出ようかなと思つます」

父「それは何故だ?」

秀「人々を救いたいからです」

父「そうか・・・いざれはこいつなるとは思つていたが分かつた」

秀「父上・じやあ」

父「しかし条件がある」

秀「条件?」

父「そりだ、条件とは・・・美蓮に勝てる

秀「母上ですか

父「そりだ」

確かに母上は元武将だつたとは聞いているが一体どれほど強いのだろうか

今思えば俺は母上の」とあまり詳しく知らないなしかし・・・やるしかない

秀「分かつた」

父「美蓮いいか?」

美蓮「ええ、私も秀と戦いたかったし」

秀「母上・・・手加減はしないでよ」

美蓮「当たり前よ秀も手加減しちゃ駄目よ」

秀「はい」

分かつていたことだがこんなに早く言つとは、俺は姓は季、名は奉、

字は高董、真名は蒼

息子の秀は、いつかは旅に出るのだろうとは思っていた。それがある子の進む道ならと

は思つてはいたがまだ行つて欲しくは無い・・・18といつ年齢は、
いい頃合だが

だから俺は、条件を出した美蓮に勝つこと秀も武は出来るようだが

美蓮は強い今で言つなら俺の主の孫堅殿に匹敵するほどの力

悪いな秀まだ・・・俺達の傍にいてくれ

母上と戦うためいつも俺が修行に使つている場所にきた。

俺は、手甲を付け構える母上も槍を構えた殺氣は出してはいながら

その一言だだが、・・・・・勝てるー自惚れではない勝てる

そういう感じがある。

秀「母上、行くよー。」

美蓮「きなさい、秀ー。」

秀「はああああー！南斗烈殺拳ー！」

美蓮「つーー？」

がきん！がきん！がきん！

鋭い手刀の連撃を槍でいなす。母上しかしそこに余裕はない

秀「母上も反撃して」

美蓮「言つわね。でもこんなに強いなんて正直予想外よ。」

秀「まだまだ、こんなものではなーよ。」

美蓮「じゃあ私も、本気だすわよ」

母上の雰囲気が変わる先は殺氣を出していなかつたが今は本気の殺氣を

俺に向けている。そして・・・母上が動く

美蓮「はつ！はい！はい！はい！はい！」

高速の連続突き並の武将なら間違いなく見切ることは出来ない視界を覆いつくす。

槍・・・・・・だが

秀「当たらないよ、母上・・・南斗白鷺猛脚！」

斬！

後ろに、仰け反り脚を放つが母上は後ろに飛びのきかわすしかしそれは、予測済み

秀「いきますよ母上これぞ、白鷺拳の真髓・烈脚空舞！」

美蓮「きやあああああ！」

変幻自在の脚技が母上を襲い母上は倒れるそして俺は母上の首筋に手刀をあてる。

秀「勝負あり・・・だね」

美蓮「ええ、まさか負けるとは思わなかつたわ」

蒼「本当だな、まさか美蓮が負けるとは」

秀「俺も修行を沢山したからね。で父上」

蒼「はあ、仕方ない行つて来い秀そして人々を救つてこい」

秀「はい！」

美蓮「でも、明日にしなさいよもう晩いしね」

といつことで、父上、母上から旅に出る許可をもらひその日は旅の支度をした。

そして、次の日

秀「父上、母上行つてきます」

蒼「秀。少し待て」

秀「何？」

蒼「これを俺と美蓮からの餞別だ」

秀「これは、手甲と脚甲？」

蒼「そうだお前のはもうボロボロだろそれに、それは鍛冶屋に作らせた一級品だ」

秀「ありがとう父上、母上」

美蓮「名は、秀が決めなさい自分の一部となる武器ですかね」

武器の名・・・か手甲と脚甲の色は白銀でそれぞれ、龍と虎が、彫られている。

そして龍の田には蒼い石が、虎の田には紅い石が、埋め込まれている。・・・・よし！

秀「手甲の名は、紅虎、脚甲の名は、蒼龍だ」

美蓮「いい名ね。大切にしなさいよ」

秀「はい」

古い手甲を外し、紅虎と蒼龍を装着する。すると吸い付くように、まるまるす”じい

その一言だ初めて着けるのに、まるで長年使っているかのように

秀「父上、母上行つてきまゆ」

蒼「行つてこい」

美蓮「たまには手紙を書いてね」

秀「はい」

こうして俺は、旅に出た人々を救うために・・・黄巾党を討つために

今仁の星は光つた。

第三話「白鷺の旅立ち」（後書き）

ついに旅に出ました最初は誰に会うんでしょうか

そして今敵はどうしようと考へていますやはりシユウの敵と言えば

彼の将星でしょうか

そして意見があつてシユウの能力を外します

第四話 { VS 黄巾党 } (前書き)

はーーーーからーーー・ー・か・らシユウ無双が始まります。

どいだお楽しみください

第四話 {VS黄巾党}

旅に出て2週間が過ぎた。食糧も路銀もまだ十分にある。

しかしそうそろ、布団が恋しくなる。

何処かに村はないだろ？

秀「また今日も、野宿かな」

そうして、半ば野宿を覚悟したとき俺は、ある異変に気がつく

秀「つー？これは血の臭い」

何処かの村が襲われているのかな、早く行かなくては

方向は・・・東の方か！

秀「これは・・・ひどい」

村は焼け焦げ民は傷つき、その顔は皆、絶望しているようだった。

俺は、一先ず何があつたか聞くことにした。

秀「一体何があつたんだ?」

町民「黄巾党が襲つてきたんだ」

秀「やはり、しかしいの県令は死んでいたんだ?」

町民「あいつは、黄巾党が襲つてくる前に逃げやがったよ」

秀「くつ、何て奴だ!」

町民「そんな」とより、坊主早く逃げたほうがいい、また来るかもしれないからな」

秀「数はどれくらいいたんだ?」

町民「確か、五百はいたはずだぜ」

五百か・・・その程度の数なら、なんとかなるな

秀「その黄巾党は、何処に?」

町民「ん?」の先にある谷にいるんじゃないのか」

秀「そうですか」

町民「ちよつ、何処へ行くんだー?」

秀「黄巾党の所に」

町民「馬鹿か坊主！？殺されちまつぞ」

秀「死なないや」

そう言い残し俺は、黄巾党の所に向かった。

恐らく黄巾党は、村を襲うのに成功して舞い上がりしているはず

そして、案の定黄巾党は酒を飲み、宴会をしていた。

秀「よく、奪つた物であそこまで、陽気に宴ができるものだ」

俺は、怒りを通り越し、呆れてしまつ

そして、俺は地を蹴り大きく飛躍し黄巾党がいる所に着地した。

黄巾党A「なつ！？何だてめえは！」

秀「俺は、お前達を裁く者だ」

黄巾党頭「何い～！ガキのくせにしゃらぐせえ！野郎共殺つちまえ

！」

リーダーらしき男が声を荒げる。

それを合図に他の黄巾党が襲い掛かつってきた。

剣を振り回し、『こちら』くる黄巾党の攻撃を避け反撃をする。

秀「はああああー・シヨオウー！」

黄巾党A「やいやあー！」

黄巾党B「ベギヤあー！」

黄巾党C「なつー？何だよこのガキ素手で斬りやがったぞ！」

黄巾党頭「ちつ！ 囲め相手は1人なんだぞ！」

ふん！ 囲めか・・・『こちら』しては好都合だな

そもそも、俺の南斗白鷺拳は一対多が主流なのだ

秀「はあああー・たああーー！」

俺は大きく飛躍し空中で体制を変え、逆立ちした状態で着地する。そして、・・・。

斬！ 斬！ 斬！ 斬！ 斬！

・・・体制を戻し

斬!!

秀「南斗烈脚斬陣」

黄巾党曰「ばつ、化け物に、逃げやがば！」

秀「貴様ら、誰一人逃げられると思うなよ」

そして、一刻も経たない間に黄巾党をすべて殺した。

そこから俺は慈悲の念を込め、黄巾党の亡き骸を埋め墓を作った。

秀「来世では、善人でいて欲しいものだな」

そう言い残し俺は、あの村に帰った。

町民「あつー？坊主無事だつたんだな黄巾党は？」

秀「全員、殺してきました」

町民「は？も、もう一度言つてくれ」

秀「全員、殺しました」

そこからが大変だったあの村の人があの谷へ、確認しに行って
戻ってきたかと思つたらいきなり、「宴だああああああああ……！」と
か言つて

そして今俺は宴の席にいる。

町民「まさか坊主が、本当にやつてくれるとせ、思わなかつたぜ」

町民「そうだなだが、坊主感謝してゐるぜ」

秀「いや、俺はやるべき」とをやつただけだ

町民「言つなあ坊主、大した奴だぜホント」

町民「そうだ坊主」の県令になんねえか？

秀「悪いが断るよ、まだ旅を続けたいから」

町民「そつかじやあ今日は、楽しんでくれや」

町民「そのつもりだよ」

宴は夜晚ぐまで続いた。まるで絶望しかなかつた民の顔は

生き生きとしていた。俺はそれを見た時旅に出てよかつたと

そう思つたこれからも救つていこうと心改めて誓つた。

そして今仁の星は強く光つた

第四話「VS黄巾党」（後書き）

うへんまだ原作キャラが出てこないな

それに最初は誰をだそつか

悩みますねえ~

第五話 {はわわといわわ} (前書き)

まあタイトルを見てわかるでしょうが
あの二人です。

第五話「はわわとあわわ」

あの黄巾党を討伐してから、何故か『無刀の武神』、と呼ばれるよひになつた。なんでも武器を使わずに、斬ることが出来るからとかせてもう少し呑ねつて、欲しいそして今俺は、小さな町にいる。

秀「腹が空いたな、あそこに入るか」

俺は、腹が空いたので、近くにあつた。飲食店に入った。

店主「いらっしゃい！何にする兄ちゃん

秀「ああ、じゃあ麻婆豆腐と餃子を」

店主「まいど！少しだけ待つてな」

元気のいい店主だったな、あの乱世では、あそこまで元気な人は、いなかつた。

食糧も水も満足には、とれないその分こっちの世界のほうが、平和だな

店主「ほい兄ちゃん出来たぜ」

秀「ありがとうございます」

美味しい、いつも自分で作っているが、あまり凝らないからな

ああ、料理は出来るぞ、伊達にシバをあそこまで育てたわけじゃない

秀「い」ちも「わ」せ

店主「おう！また来なよ兄ちゃん」

お金を支払い、店を出た。その時・・・。

? 「せわわ～..」離里をけりん「

何か、よく分からぬ、声をあげ慌ててゐる。少女が2人いた。

まあ、放つてはおけないか

秀「どうしたんだ？」

? 「はわつ！？だ、誰でしゅか！あう 噛んじゃいました」

秀「俺は止水、何があつたのか、すゞく慌てていたが」

孔明「わ、私は諸葛孔明といいます（かつこいい人だなあ）」

鳳統「ほ、鳳統です（かつこいいでしゅ）」

秀「孔明に鳳統だねそれでどうしたんだ？」

孔明「じ、実は・・・」

どうやら、2人は、水鏡塾と言つ所で勉学に励んでいたのだが、最近その塾の近くの洞窟を盗賊が住処にし、通りかかった商人などを襲い荷物を奪つている。らしいそこで、この2人は、その盗賊を退治してくれることになる。

人を探しに、此処まで来たのだが、誰一人相手にしてくれなく、困つていたそうだ。

秀「なら、俺がやつてやろうつか？」

孔明「はわー、本当ですか！？」

鳳統「ありがとうございます！」

というわけで、盜賊退治を引き受け、2人に水鏡塾に連れて行つてもらつた。

秀「此処が水鏡塾か」

? 「朱里！ 雛里！ あなた達何処に行つてたの…？」

孔明「水鏡先生、ごめんなさい」

鳳統「水鏡先生！ 朱里ちゃんは、悪くありません！ 朱里ちゃんは…。
・。」「

塾から出てきて、孔明達を叱つているのは、先生みたいだな

その先生の口振りからして、この2人の独断である町まで来たのか

水鏡「まったく、心配させてあら、あなたは？」

秀「俺は、止水です。この2人から盜賊がでて困つている。と聞いたので力にならうと」

水鏡「でも、あなただけでは…」

秀「大丈夫です。まかせてください」

水鏡「じゃあ、お願ひします。ですが無理はしないでください」

秀「分かつてますよ」

それから、洞窟の場所を聞いて、そこに向かった。盗賊の数はだいたい百人弱

洞窟を住処にしているから、少ないとは思つたが、妥当な数だな、つと着いたな見張りは、2人が無用心だな

盗賊A「なあ、いつ交代なんだ?」

盗賊B「そろそろのはずだぜ」

盗賊A「そういや～この前捕まえた小娘どうするんだ?」

盗賊B「どうかのお偉いさんに売るんだとよだから手出すなよ」

盗賊A「へつ!誰があんな小娘に手出すかよ」

小娘?こいつら何処からか、攫つてきたのか幸い何もされではないな
いようだな

しかし更生させる。つもりでいたが・・・。

盗賊A「何だ？ てめえは」

秀「計画変更だな」

盗賊B「は?何言つてんだこいつ」

盗賊A「さあなとりあえず、おい！ガキ身包み置いてけそつすりや
命だけは助けてやる」

秀「断る俺は、お前達を殺しにきたんだからな」

斬
！
斬
！

盜賊A「なにしゃがつ・・・あれ景色がずれて・・ぐさやあ！」

盗賊B「なつ！？何だよまつまさかお前が無刀の・・武神ぶべら！」

仲間には気づかれていないようだな、大方酒飲んで、潰れているだろうが

容赦はしないぞ

斬！斬！斬！

盗賊曰「わやああああ！」

盜賊D「ぐげええ！」

盗賊曰「工「ハヤああああああああーー。」

此処が頭の部屋だな、中には気配が2つ1人は頭だろうなもう一人は、攫われた。

娘かなとりあえず入るか

頭「へへへーこの小娘を売りやしばらく遊んで暮らせるぜ」

?「ひっく・・うう・・・ひっく」

頭「うるせえな！大人しくしてろ」

秀「大人しくするのはお前だ」

頭「なつ！？誰だてめえ・・うわあああ！」

俺が現れた。ことに驚き慌てた頭の隙に頭に詰め寄り娘から

離す。よう投げ飛ばす。

秀「大丈夫か？」

?「う、うん」

秀「ああ、早くここから出よ！」

頭「まつ待ちやがれ！無事元氣から出でるとなればなよ

そう言ひ頭は、武器である。戦斧をとりだし、襲い掛かってきた。

秀「はあああー！」

斬！斬！斬！

しかし振り下ろした戦斧は、届く前に飛び去られた。

頭「なつー？俺の戦斧が

秀「終わりだ」

頭「まつー！待つてくれ俺が悪かった、だから命だけは

秀「お前は、そう言ひてきた者達を助けたか？助けてないだらだから死ね」

頭「ぎやああああー！」

頭にとどめを差し、俺と助けた娘は、洞窟から出た。

しかしこの娘は、見たところ5～6歳くらいだらつ

秀「そういえば君の名前は？」

天蓮「天蓮は天蓮」

秀「天蓮ちゃんか俺は、止水、天蓮ちゃんはどうしてあやし〜？」

天蓮「町・・襲われて・・攫われて、それで・・・」

秀「ああもういいよ、頑張ったね。」ナデナデ

天蓮「ん〜止水お父さんみたい」

秀「お父さん？」

天蓮「うん・・天蓮お父さんもお母さんもいなくて、お祖父ちゃんのところにいたのだからお父さんがどんな風か分かんないけどたぶん・・・」んな感じだと思ひ

お父さんか・・・。悪くは無いな俺も娘は欲しかつたし、

秀「そりかじや あ今日から、天蓮のお父さんだな」

天蓮「本当ー天蓮のお父さんになつてくれるのー？」

秀「ああ、証拠に秀、これが俺の真名だよ」

天蓮「わ〜い！天蓮のお父さんだ！」

俺がそう言つと、本当に嬉しかったのか飛びついてくる。天蓮
ははは、しかしお父さんか、何かむず痒いな・・・お母さんは誰
にしようか

秀「じゃあ、天蓮帰るわ」

天蓮「何処に?」

秀「水鏡塾といつといふのだよ」

天蓮「うんー帰る」

元気があつていいな、シバもこいついう時期があつたな
だがこの娘だけは、天蓮だけは、守らないとな

天蓮「天蓮のお父さん お父さん」

ははは、守つてやらないとな、なにがなんでも

守るものが増えるのは、大変だがこの幸せを壊さないようこ

精一杯頑張るとしよう、春蘭と秋蘭にも早く会いたいなそんなこと

を思い俺と天蓮は

水鏡塾へと帰つた。

第五話「はわわとあわわ」（後書き）

オリキヤラが出ちやつたぜ！しかもシユウをお父さんにしちやつた
ぜ！

でもいい感じじゃないかな、わいお母さんば、だれだらな？

設定

名前・天蓮

年齢・璃々とおなじくらい

身長・璃々より少し小さめ

盗賊に捕まつていてるところをシユウに助けられた
その際シユウのことをお父さんみたいといいシユウも
そう呼んでもいことこのことでシユウをお父さんと呼ぶ
それからシユウに対し本当のお父さんのように甘える
シユウも満更じゃないといつかかなり嬉しがつている。

天蓮にお母さんと呼ばせる人は誰にしようかな？

候補的には

魏の人の誰かで

- ・強く言つと
- ・秋蘭や華琳あと凪あたりかな

第六話 { まのまのな田 } (前書き)

朱里に離里つて可愛いよね~

思わず保護欲がゲフンゲフン...ビリビリお楽しみください

第六話 ほのぼのな日

盗賊を倒し、水鏡塾にたどり着いた。俺は、色々とお礼を言われ

孔明と鳳統から真名を受け取った。そして俺も真名を預けた。

その後、帰らうとするところが、もう反対し、しばらく世話をなることにした。

さすがに、涙田 + 上田遣いは堪える。

秀「ん？」

この塾に世話をになって、もう一週間は経つただろうか、田を覚ましき起き上がろうとするが、上がらないそして部屋には自分以外の人の寝息が聞こえる。

秀「またか」

朱里「すう・・すう・・」

錆里「すう・・すう・・」

天蓮「ん・・お父さん・・すう・・」

これは、いつものことだが、『まあ、いいがこのままじゃ、

俺が起きれないな、今日は、朝食の当番なんだがなまあ、起いすのも

悪いなそつ思い俺は、3人が起きないよつにそつと抜けた。

水鏡「あら、いつも早いわね」

秀「ただで泊めても、うつのは気が引けますから」

水鏡「ふふ、ありがと」

秀「いえ、はい出来ましたよ」

水鏡「私は、3人を呼んでくるわ、”また”なんでしょう」

秀「ええ、お願ひします」

水鏡先生は、朱里達を起こしに行つた。しかしこつまでいようか

そろそろ、出発したほうがいいよなとりあえず、話してみるか

朱里「ふあ～、秀さんおはよつ」
朱里「お、おはよつ」
朱里「おはよつ」

天蓮「お父さん、おはよつ」

起きてきた。3人が挨拶をする。その内天蓮だけが飛びついてくる。

そして、それを羨ましそうに見る朱里と雛里・・・何故だろうか？

水鏡「それでは・・・」

全員「・・・」
「いただきます」

朱里「おいしいね雛里ちゃん」

雛里「うん！おいしいね朱里ちゃん」

天蓮「お父さん、あ～ん」

秀「ん？あ～ん」

天蓮「おいしい？」

秀「ああ、おいしくよ」

朝食を食べ終え、朱里と雛里は勉強をし、天蓮はお昼寝

そして、俺は・・・。

秀「ふ〜、はつーでやあああー。」

斬！斬！

体が鈍らないよつこ、鍛錬をする。ついでに、薪を割る？

ふむ、それにしてもいつ、話そつか・・・ん？視線を感じるなこれは。。。

秀「出て来い、朱里、雛里」

朱里「はわわわ！？」／＼／＼

雛里「あわわわ！？」／＼／＼

ん？何で顔が真っ赤なんだ？ああそりいえば、上半身裸だったな

これが原因か？

秀さんがここ水鏡塾に来て、まだ一週間くらいかなその一週間は本当に楽しかった。秀さんは、・・・その・・・はわわわ／＼・・・・・

すみません、取り乱しました。それで秀さんはたった1人で数百人いた盗賊を無傷で退治した。お／＼強くて、かつこよくて、優しい人傍にいると、落ち着いて、でもどきどきして、はわわわ／＼・・・・

雛里「朱里ちゃんどうしたの？」

朱里「はうわ！？吃驚したあ雛里ちゃんか」

雛里「どうしたの？」

朱里「う、うん雛里ちゃんは、秀さんのことどう想つてる？」

雛里「わ、私は・・好きでしゅ／＼／＼／＼

雛里ちゃんも私と同じ気持ち、なんだね。でも秀さんは、旅をして

いた。

と語っていたから、おやじへ、まだ他にいるー···。おーー。

朱里「雛ちゃん！」

雑里「あうわ！？な、何朱里ちゃん？」

朱里「離里ちゃん、今から粉ちゃんのところに行こう」

「え？ どうして？」

朱里「それはね、・・・（説明中）どうへやうしたらあつと秀さんと一緒にいられるよ」

話も終わって、私は、雛里ちゃんを連れて、秀さんのところに向かつた。

今の時間なら、秀さんは外にいるはず。

秀「ふうはつーでやあああ！」

いた！・・・でも／＼＼＼秀さんの裸・・・はわわわわ／＼＼＼

それにやつぱり、かっここいでしゅーあつ、噛んでじゅつた。

雛里「あわわわ／＼／＼

雛里ちゃんも、お顔が真っ赤だ。多分私も・・・そんなことを考えていたとき

秀「出て来い、朱里、雛里」

朱里「はわわわ！？／＼／＼

雛里「あわわわ！？／＼／＼

「う～ばれちゃいました。何か恥ずかしいでしゅ・・・でもーこれは好機！

S a i d o u t

何か2人から、とつもない気?みたいなのを感じるが特に朱里

雛里は、先からあわわわ、としか言つてないしだが、朱里の雰囲氣的

に話がある。感じだな

秀「何か用か？」

朱里「おお、お願ひがありましゅーあう、噉んじゅいまちたーーー

雛里「あわわわーーーーお、落ち着いて、朱里ちゃん」

朱里「う、うんあの秀さん、・・・」

秀「お願ひとは？」

朱里「私達は明日義勇軍に参加するために旅に出ます」

雛里「その時に秀さんに一緒に来てほしーんです」

なるほど、護衛か2人は、軍師だったな確かにこの2人だけじゃ、
不安だよな

俺も心配だし。

秀「分かつた引受けよつ

朱里「あ、ありがとひびきましゅーあう、噉んじゅいまちたーーー

」

「あつがんじれニサシタ一ノハ、墨ニシキニサシタ——」

大丈夫かな？本当にまあ俺が守るが、もう少ししつかりしてもらいたいが

「はわわわ／＼／＼」、「あわわわ／＼／＼」可憐いからいこかとつあ
えず

秀「落ち着いて」ナデナデ

難里「あわわわ！？」／＼＼＼＼

頭を撫でたが逆効果だつたか、むうどうじよいか?と思つていた。

水鏡「嘘うそ、そろそろお廻りにしましょ」

秀「はい、まあ行こう朱里、離里明日の準備もあるだろ」

朱里&雛里「「はい！」」

さて、何か明日からもう少し忙しくなりそうな予感がするな

というか、そろそろ春蘭と秋蘭に会いたくなつてくるな

(と秀が考へてゐるとき)

春蘭&秋蘭「くしゅん！」

? 「どうしたの春蘭、秋蘭風邪かしら？」

春蘭「い、いえ」

秋蘭「そういうわけでは」

? 「あら、じゃあ誰かが貴女達の話でもしてゐるのかしら？」

春蘭「秀・・・かな？／／／」

秋蘭「そうだといいな姉者／／／」

? 「何か、妬けるわね」

と何処かでこんな会話があつたとか。

第六話「ほのぼのな日」（後書き）

ほのぼのといった感じですかね。

次回いよいよあの3人の会います。

アンケート

ラスボスは誰？

? 南斗聖拳使う敵

? 北斗神拳使う敵

北斗の拳キャラ出るキャラの設定

? シュウ一緒に転生した

? 未来の希望ということでお供（天蓮ぐらー）

? 天の使いとして

アンケートにご協力くださいお願ひします。

ちよつとしたアンケート（前書き）

これからこの作品の行き先は！？

ちょっとしたアンケート

どうもこの小説『再び輝く仁の星』の作者龍斗です

この度、ちょっとしたアンケートをとるために、この場を設けました。

私の小説の主人公であるショウですが、今さらながら俺口調はいいのかな？

一人称を私に変えたほうがいいのかな？

ちなみにそういう場合は、朱里や離里次回くらいに会う劉備、关羽、張飛に

「俺より、私のほうが似合っていますよ」とか言われて、以降私になるという感じですが

どうでしょうか？

そして、もう一つ本作のラスボスのことについてです。

北斗神拳相手では、分が悪いとの意見があつたので、敵は南斗です。

?~もつサウザーを出しちゃう

?北斗の拳?で「北斗の先人」とか聞きますがはつきし悪靈

その悪靈の南斗版「南斗の先人」を出す（絶対いる…）

こんな感じです。答えてくれたら嬉しいです。

小説のほうも、頑張って描写などを上手くお書きされるようになります。

これからも『再び輝く』の星をよろしくお願いします！

ちよつとしたアンケート（後書き）

魏 じゃなくて、全 にならうかな予感

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9469n/>

再び輝く仁の星

2010年10月15日04時26分発行